

始めよう!

複式簿記とアパマン経理実務の勉強 第2回

単式簿記と複式簿記の違いを
キツチリと理解しよう!

家計簿は単式簿記の
代表格!

複式簿記という言葉はよく聞かれると思いますが、それに対応するものとしての単式簿記という言葉が聞かれたことはあるでしょうか?このシリーズでは複式簿記について勉強することが主眼ですが、単式簿記の意味についてもシッカリと理解しておけば複式簿記の特徴がおのずと明らかになりますので、最初にこの単式簿記の意味について解説しておきたいと思えます。

単式簿記の意味についてヤフー辞書では次のように定義しております。

「取引の貸借記入をせず、現金の収支、商品の増減などだけを記入する簿記。大福帳、家計簿など」となっています。このうち大福帳というのは商人が得意先に口座を設け、取引状況を明らかにするもの

です。現代風に言えば得意先元帳とすることが出来ます。いずれにしても現金とか商品、あるいは売掛金等の増減および残高だけを記帳するというものから、何となく理解できるのではないのでしょうか?なお「簿記」とは取引を帳簿に記入する技法のことです。

単式簿記のデメリットを
克服した複式簿記

それでは一方の複式簿記とはどういうものでしょうか。同じくヤフー辞書によりますと、「すべての取引を、ある勘定の借方と他の勘定の貸方に同じ金額を記入し、貸借平均の原理に基づいて組織的に記録・計算・整理する簿記」のことです。

これだけではよく分からないと思いますので、本屋で購入するケースを例に挙げてご説明したいと思います。

本の値段を1000円としますと、複式簿記では「現金」という資産が1000円減少して、図書費という経費が1000円増えた」と考えます。そして、このような取引を複式簿記では仕訳(しわけ)という技法を使って、次のように借方(かりかた)左側)と貸方(かしかた)右側)に該当する勘定科目と金額を記入します。

(借方) 図書費	1000 /
(貸方) 現金	1000

体系的な複式簿記の仕組みについては次回においてご説明しますが、ここではこの仕訳の意味について簡単に解説しておきます。

まず借方に計上されている図書費は経費の一種ですが、経費というのは増える場合には左側(借方)に記入し、反対に減少する場合には右側(貸

方)に記入するルールになっているのです。この仕訳事例では左側(借方)に記入されていますので図書費という経費が1000円(円)増えたということを意味します。

一方、貸方に計上されている現金ですが、現金のような資産についても、増加する場合には左側(借方)に記入し、反対に減少する場合には右側(貸方)に記入することになっています。上記の仕訳事例では現金が貸方(右側)に計上されていますので、現金という資産が1000円(円)減ったということの意味しています。

このように複式簿記では1つの取引について、該当する勘定科目の借方と貸方のいずれかに同じ金額を記入する仕組みになっているのです。

それでは上記の取引について単式簿記ではどのように処理するのでしょうか?

単式簿記の場合には仕訳という手続きは特になく、現金出納帳の支出欄に1000円(円)という金額を記入して終わりです。つまり、単式簿記の場合には現金という勘定科目のみにスポットを当て、そ

の増減と残高を記入するだけで終了です。複式簿記のように図書費にスポットを当てて、その増減を計算するようなことは原則として行いませんので、一定期間においてどれだけの経費がかかったかということは一切分かりません。

このように単式簿記の場合にはその仕組み上、どうしても限界があるのです。つまり、複式簿記は単式簿記の限界を克服する過程において生み出された技法であるということが出来ます。

次回からは複式簿記の仕組みについて詳しく解説していきます。

profile

1952年香川県生まれ。慶応大学卒業。(株)鹿谷総合研究所代表取締役。著書に「家主さん、地主さん、もっと勉強して下さい!」、「アパマン経営、なぜ失敗するのか?」など。家主さん向けの会計ソフト「らくらく社計簿」を独自に開発、販売している。



鹿谷会計事務所
鹿谷 哲也 所長